

原子力「平和・進歩・成長」の夢（欲望）の果ての歴史

——『複数のヒロシマ』『夢の原子力』を読む

天野 恵一

「わだつみ会」のキリスト者大島孝一さんが九五年の人生を終えられたという連絡をもらって以後、彼ら戦中派の人びとと私たちの反天皇制・反靖国運動での交流の意味について、しばし立ち止まってあらためて少し考えてみる時間をもとうと思った。まず、私の二つの大島インタビューを読みなおしてみた。

一回目の「平和運動と『天皇代替わり』の闘い」（『象徴天皇制研究』創刊号（一九九一年九月））は、運動のなかでうまれた人間関係によりかかった、ひどく荒っぽいインタビュー。水島たかしと組んで二〇〇六年一月に、それなりに準備してもう一度やりなおしておいてよかったと思わせる（「戦死者の追悼と靖国・千鳥ヶ淵問題」『運動（経験）』19号）。それは、インタビュー（私）の怠慢さが露呈している恥ずかしいものであった。そこには、今だったらそこからいろいろひろげて語ってもらいたい発言が残されている（まったく突っこみが足りない！）。それは「原水禁」

運動についての私の質問に対する以下のような言葉である。

ちよっとした傍流といえますか、例えば広島に行つて、ある種のショックだったのは、広島が平和運動のメッカ、原水爆禁止運動のメッカかと思つたのに、全然そうじゃないわけですね。街の雰囲気として、とにかく原爆の被害者なんだと、だけど原水爆そのものに対して強い「ノー」ということをしない。そこまで痛めつけられてしまつてしまつていて。そういう中で一生懸命広島を利用しようとしていて。それで世論をつくらうとしていて、ふうな運動というのはあまり感心しなかった。そんな感じがしたんです。だからそこで、例の原水禁と原水協のことになったときに、両方ともどっちもどっちだなという感じがしてきた。

原発の問題というのが見えてくるのが、消費者運動と関わりをもちはじめたということがあった（傍点引用者）。

インタビューの私は、ここから話が別の方向へ流れてしまふにまかせている。ここは、より具体的に話を聞きなおすべきだったのに。おそらく、前回紹介した福岡良明が『焦土の記憶』で明らかにした広島当時の状況が、大島の体験を通してリアルにそれなりに語られたであろうに。

『焦土の記憶』に続いて、福岡と山口誠、吉村和真の三人の編者による『複数のヒロシマ——記憶の戦後史とメディアの力学』（青弓社）を私は読んでみた。

この多数のライター相互の討論がキチンと持続されていただろうことを実感させる、単純なる論文アンソロジーではない「共同研究」の著作（それと、二人の漫画家への〈中沢啓治・こうの史代〉、聞くべき事をキチンと聞いたインタビューもある）の「プロローグ」で福岡は、本書のモチーフについてこう語っている。

今日の「ヒロシマ」という語には、「被爆体験」「戦争・平和」「核兵器廃絶」「反原発」といったものが、混然と込められている。それはあたかも、一九四五年八月六日の経験に根ざしているかのように捉えられる。だが、「ヒロシマ」をめぐる言説は、つねにそのようにあったわけではない。時代や社会状況の関りのなかで、祝祭的な高揚感や「原子力平和利用」の希望に結び付いたり、

政治主義的な理念への嫌悪を思い起こさせることもあった。「ヒロシマ」は一つの語義に収斂されるものではなく、複数の語りが存在してきたのである。

広島 of 被爆体験を扱った書物はこれまでに多く刊行されてきた。それに根ざした反核の主張にも膨大な蓄積がある。だが、「ヒロシマ」はこれまでにメディアにおいていかに語られてきたのか、言い換えれば「ヒロシマ」はいかに欲望されてきたのかという問いについては、実はさほど検証や整理が進んでいないのではないだろうか。たしかに、一九九〇年代以降、ポスト・コロナル研究やカルチュラル・スタディーズの伸長とともに、広島 of 記憶を問いなおす論議は盛り上がりを見せるようになった。福島原発事故以後、それらと「平和利用」の接合を批判的に論じる動きもないわけではない。しかし、記憶をめぐる「欲望」が少なからず指摘されてきた一方、「なぜ、そのような記憶が紡がれざるをえなかったのか」という点にどれほど分け入ってきたのかというと、そこには限りもあつたように思われる。

現在の観点から過去の記憶を批判することにも、一定の意義は認められよう。だが「欲望」批判がそれなりに積み上げられてきた一方、「欲望を生み出すメカニズム」はどれほど捉えられてきただろうか。さらに言えば「欲望の批判」がその「欲望」に仮託せざるをえなかった意

図や心情を見失わせることにもならないだろうか。それらを生み出さざるを得ない社会的磁場に分け入らなければ見えないものも、少なくはないように思う。

「フクシマ」との関連で、「ヒロシマ」はますます多く論じられつつある。だが、そこから一歩退いて、「ヒロシマ」を論じる磁場自体を問い直すことも、無益ではあるまい。それは同時に、「フクシマ」を語ろうとしているわれわれの足元を問い直すことになるのではないだろうか。

本書は、福間の『被爆の明るさ』のゆくえ——戦後初期の『八・六』イベントと広島復興大博覧会」、山本昭宏「大衆文化としての地方文芸と被爆体験——詩誌『われわれの詩』『われらのうた』の文芸的公共性」、上杉和央「連続と断絶の都市像——もう一つの『平和』都市・呉」、吉村和真「マンガに描かれた『ヒロシマ』——その〈風景〉から読み解く」、森下達「被爆国民」の『悲願』と『怨嗟』——『ゴジラ』と『原爆映画』をめぐって」、杉本淑彦「被爆変異譚への欲望——『ウルトラの世界』と放射線」、山口誠「広島、ヒロシマ、広島、ひろしま——広島修学旅行にみる戦争体験の変容」が収められている。それらはすべて「ヒロシマ」をうみだす「欲望のメカニズム」に内在し、それに仮託せざるをえなかった心情や意図に分け入

に寄与することを目的」とするものであった。だが、なかでも強く意識されていたのは、「原子力平和利用」の促進であった。広島市長・渡邊忠雄は、『広島復興大博覧会誌』（広島復興大博覧会編集委員会編、広島市役所、一九五九年）の「刊行のことば」において、こう述べている。

世界が正に「第三の火」といわれる原子力時代を迎えようとしている時、広島市の教訓を再確認し、原子力の在り方を再検討して、核兵器の使用を断固禁止し、原子力をして、平和利用一本に絞ることの如何に緊要切実であるかを痛感せざるをえないのであります。

原爆を受け入れた広島市の「教訓」に立脚しつつ、「核兵器の使用」の拒絶の延長で「平和利用一本に絞る」とことが、ここでは模索されていた。

この博覧会は、会期五十日間で来場者数（入場券総売上数）が九十三万人に及ぶなど、地方の博覧会としてはかなり盛況であった。なかでも、多くの来場者の関心を引いたのが、主要パビリオンである原子力科学館であった。

「広島復興大博覧会誌」によれば、「押すな押すなで原子力科学館などは入口で入場制限を繰り返して、このため入れる入れないで、口論まで始まる騒ぎ」すらあったという。

って、詳細に検証しようという姿勢（方法）は、それなりに貫かれているのだ。検証の対象は雑誌論文（地方同人誌を含む）、新聞記事、そして映画、漫画、テレビといったポピュラーカルチャーまで、幅広く、その言説や表象がこまかくフォローされている。その中でも、山口誠の直接の被爆者の被害体験にこだわりぬいた、中学校教員江口保のつくりだした広島修学旅行のスタイルの歴史（その改良を含めた）に、松元實の「ヒロシマ」の加害責任を対置しつづけた批判をクロスさせて検証した「広島、ヒロシマ、広島、ひろしま」は力作であった。そこには複数の「ヒロシマ」がうみだされてくる「欲望のメカニズム」が「修学旅行」のかたちを通してわかりやすく歴史的に整理されて明示されている。

もう一つの力作論文『被爆の明るさ』のゆくえ」で福間は、原子力の「平和利用」への強い志向は、被爆体験の悲惨さ重さにこそ裏打ちされて広島でうみだされたという問題を、広島市主催で一九五八年四月一日から五月二〇日まで開催された「広島復興大博覧会」を具体的に分析してみせることで、クッキリと描き出してみせる。

この博覧会は「広島市復興の現状ならびにその産業と観光とを広く紅湖に紹介するとともに、近代科学産業、貿易、文化の粋を展示し将来わが国産業文化の振興

このパビリオンに毎日新聞社とともに日本原子力産業会議が協賛していた。日本原子力産業会議は、一九五六年の創設以降、原子力の産業利用に関する広報活動をおこない、全国各地で博覧会を手掛けていた。この原子力科学館への協賛も、その一環であった。

興味深いのは、このパビリオンとして用いられたのが、広島平和記念資料館（原爆資料館）だったことである。被爆のおぞましさと後遺症の悲惨さを伝える施設が、「平和利用」を訴える場として用いられたのである。『広島復興大博覧会誌』には、原子力科学館の趣旨がこう記されている。

「原子」「放射能」「アイソトープ」等原子科学の基礎知識を平易に解説し、人口四十万の雄都広島を一瞬にして廃墟と化した原子力の脅威的破壊力を実存の資料によって示すと共に、その平和利用の姿を世界各国から集めた貴重な資料によって産業、農業、医学等の各分野にいかに応用され人類文化の発展に寄与しているかを示す。

この記述のとおり、原子力科学館には、被爆体験の重さと「平和利用」の未来とが併存していた。

福間は、まず「八・六」がブラスバンドや花電車、演芸大会の明るい「祝祭」としてスタートせざるをえなかったと同様に、被爆した大量の死者たち、そして後遺症に苛

れる人びとが存在し続ける「重さ」こそが原子力「平和利用」の夢をかきたてたという広島の人たちの心情の内側にまでおりて、問題を考えるべきだと訴えているのである。

吉見俊哉の『夢の原子力——Atoms for Dream』（ちくま新書、二〇一二年）も、戦後の経済成長のプロセスのなかで被爆体験の恐怖としての原子力がどのような成長（平和利用）の希望へと変容（逆転）していったかが、より具体的に検証されている。吉見はそこで、「復興博」以前（一九五六年）の広島での「原子力平和利用博」について以下のように論じている。

開会式当日、中国新聞は広島市や広島大学の原子力博関係者を集める懇談会の場を設けているが、その懇談のなかでも「広島では『原子力イコール原爆』と誤っている人がむしろ知識階級に多い」が、これは誤った観念で、最近の「学生の考え方は、原・水爆と平和利用博覧会をはっきり区別して割切っている」との意見が述べられていた。これは広島大助教授だった高中順一によるものだが、広島市助役の佐々木鋭は、「一部に『この博覧会はアメリカの売り込みの手先になることではないか。そういうものに県や市が協力するのはおかしい』と抗議する人がいるが、平和利用は将来必ず実現させねばならない前向きの問題だから、広島が原爆でやられたからといっ

て、この機会を利用しないのは了見が狭い」と批判していた（中国、五六年五月二十七日）。

広島での原子力博には西日本各地から団体客が訪れていたが、そのなかには長崎からの団体客も含まれていた。開会の翌々日の中国新聞は、原爆被害者団体協議会に出席するために広島を訪れた長崎原爆青年乙女の会の一行が原子力博の会場を見学したことを伝えている。同じ被爆地長崎から原子力博にやってきた一行は、新聞のインタビューに答え、「私たちは原爆ときいただけで心からの憤りを感じますが、会場を一巡してみても原子力がいかに人類に役立っているかが分かりました」と語っている（中国、五六年五月二十九日）。

このように、爆心地広島で開催された原子力博覧会は、広島と長崎の被爆者を巻き込み、原子力を原爆の記憶とだけ結びつけることを声高に批判し、原子力平和利用の客観性と世界的、進歩性を強調し続けたのである。（傍点引用者）

「復興博」については、このように論じている。

二年前の原子力博のときの展示と比べ、原子力科学館の展示は、被爆体験の悲惨さと原子力平和利用がもたらす夢をより積極的に結びつけようともしていた。同館の

導入部では、被爆直後の広島市街を再現した直径四メートルのパノラマや原爆投下時に降り注いだ放射線、被爆直後の降雨状態などの解説があり、被爆時の写真や模型、熱線と爆風で無残な姿に変じた着物、瓦などからビキニ環礁で死の灰を受けた第五福竜丸の調査記録までが展示されていた。これらは主に平和記念資料館から提供された資料であったが、それが米軍から提供されていた原子力平和利用についての展示と接続されていたのである。この原子力科学館での被爆体験と平和利用をセットにした展示は、二年前の展示品の再登場が多かったのにもかかわらず大人気となり……。〔傍点引用者〕

〈夢〉に「接続」された〈悲惨〉は、セットになることで、夢を押し上げていくバネとして転用されたのである。

この夢（進歩と成長⇨平和利用）の必然的ゴールとして福島原発事故（被曝）という大惨事であるのだ。

吉見は、この本の「終章」で、アメリカの世界戦略（アイゼンハワー演説）とみれば「アトムズ・フォー・ピース」であったものが、日本人によっていかなる夢（「アトムズ・フォー・ドリーム」）として経験されていったか、いかなる言語に変換され、受容されていたかを歴史的にたどってみせることが、本書の目的であると語っている。

〈3・11〉以後の現在、私たちは一人ひとりがこの夢

（欲望）が生み出され、変容しながらも、強化されてきた歴史のプロセスを、それがうまれた「社会的磁場」にまで分け入って、丁寧にとどりなおしてみる必要があるはずだ。もちろんそれは、アメリカ帝国の内側に抱えこまれた戦後（象徴天皇制）国家日本の政治史を読みかえる作業ともになされなければならぬ。ここで触れた二冊は、その作業には不可欠のテキストであるといえよう。

（あまのやすかず／本誌編集委員）